

万葉作品研究

——天平九年門部王の家に集ひて宴する歌——

本田 沙織

門部王は、「風流侍従」と称され、その名を知られる歌人である。天平九年正月に、門部王の家で橋少卿以下諸大夫が集宴を催した。その宴席で、主人門部王が歌に詠み込んだ「玉敷く」という表現。これは、後に橋諸兄が関わる宴席に多く使われており、聖武天皇や太上天皇、藤原八束、また遣新羅使人の大使など、作者未詳の二首を除けば、それ以外は、知識も位もある人達だけが歌に詠み込んでいる。これには、何らかの特殊性があるのではないだろうか。本論は、「風流侍従」門部王について考察し、「玉敷く」表現がどういったものであるか、また、三首の関連性を明らかにすることを目的とし、論を進めた。

結論として、門部王は古歌舞に通じ、場合によってはそれを基に即興で歌を吟ずることもできる「風流侍従」ならではの能力をもっていた。そして、古歌に詠み込まれていた「玉敷く」表現を、「思ひ人を迎えるための心配り」の象徴から、「貴人を迎える際に謙遜する」という意味に転用し、一歩進めた「玉敷く」表現を生み出したと考えた。また、「玉敷く」表現を歌に用いている人たちに共通して、身分の高さ、知識の高さが窺えるのは、身分の高い人達だからこそ身近な「玉敷く」ことを歌に用いることが多かったのではないかと考え、そのような人達が歌に詠むからこそ、「玉敷く」が「立派な、高貴な、身分の高い、美しい」を意味し、「風流」な表現になるのではないかとこのことを論じた。三首の関係においては、第一首で門部王が、「風流侍従」としての才能を披露し、第二首で橋文成が歌の中の時間軸を作り、技巧的に歌の世界を広げ、

第三首で榎井王が、主人に気遣いつつ全体をまとめ上げる歌を詠んだという結論に至った。

後期万葉における大宰府文化圏の研究

——宴席・贈答歌を中心に——

村上 真梨

「遠の朝廷」と呼ばれた大宰府で大伴旅人や山上憶良は自身の作品の大半の歌がつくられた。そしてその二人の作品を含め巻五には大宰府で詠まれた歌が多くある。また巻三・四・六・八にも大宰府での歌がみられる。その最盛期は大伴旅人が赴任していた神亀四年頃から天平三年の間であろう。また同じ頃、中国大陸から新たな文化・文学がもたらされた。この二つの要素が重なり、和歌の世界に新たな風が吹くことになった。大伴旅人をはじめとする大宰府官人たちである。本論では、大宰府文化圏での歌の詠まれ方について、神亀五年（七二八年）から天平二年（七三二年）における大宰府での宴席と都との贈答という点から論じた。

山上憶良や大伴坂上郎女、小野老朝臣などの歌を取り上げたが、論文中では大伴旅人を中心として論じることとなった。しかしながら、それだけ大宰府文化圏において大伴旅人の存在が大きかったのである。結論として、宴席の場よりも都との贈答歌で中国文学をふんだんに用いたということがいえる。このことから大伴旅人は都へ帰る手段として新しい文化や文学を利用したのであると考える。大宰府に赴任したことが功を奏して新しい文化・文学にいち早く触れることができたからである。大宰府で得た知識を都で、天皇のそばで活かしていきたいという旅人の想いがみてとれる。